

# 三河アララギ

平成二十五年

十一月号

第六十卷 第十一号



ニューヨーク日記(85) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

August 5, 2013 : Genève

## Blue Shoe Diaries

---



久しぶりのジュネーブ!ルンレン!でも思ったより暑いぞ。懐かしい街をのんびりうろろろするのにも良いバケーション!学校のころの友達に会ったり。今でもバツリ駅前で友達に会っちゃったりするのがジュネーブらしい!この辺にまた住みたいかもな～

---

Hello Geneva! It's been a while. It's always nice to be back. Loving strolling around the city lazily. And running into old friends at the station!! It doesn't feel like that much time has passed. Now ready to chase some food memories. Like eating good pain au chocolat!



## 感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

十三夜の月の光に咲き垂れしと南青山へのダチユラのたより

P  
68

そがひには竹の穂ゆるくゆらぎつつ夕日に赤き赤松の幹

P  
69

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

三十枚の異動者名簿の読み合せ二人のみする声からしつ

連休に体いたはらむ薬のみて又床に入るスモンのわれは

畑隅にはびこる芹の一群を取りて染みたる爪を切るなり

## おもひで

蒲郡 岡本八千代

東京の祝事ほぎごとすぎてこの夜の仰ぐ深空のみの星星星よ

西浦のこの星月夜の明るさよ仰ぎて或ことかなしみてをり

きのふ着し一つ紋付の単衣着ひとへぎをかすか吹きくる風に干しけり

祝ぎのことすぐればまたも空うつろなる心のままに暮れてゆくかな

絵も歌もいいものはいい必ずも誰たれかが見てゐるそう思ふ夜

大嵐台風十八号の去らむとすこの日この時友の葬送

思ひ出はまた甦よみがえる次々と君の逝いきにしこの夜にこそ

われら四人君を囲かこみて雑魚ざこね寝せしかの盛岡のホテルの一夜

使はずにしまひおきたるその手拭てぬぐま白の中に角田屋の文字が

碑いしを声をあげつつ読みたりき「野原ノ松ノ林ノ蔭ノ」と

## お供え物

東京 今泉 由利

小角材ヒノキ柱目を彫りすすむ仏足右足現れいづる

自らの右足に似る指長し仏様の足を彫りゆく

霧雨は集ひ育てりひと雫白く咲きたる白萩のうえ

白萩の花につゆありキラキラと私の顔を小さく写す

奥多摩の風にゆらゆら真昼間の星はいでをり白玉星草

夕顔のあまりに白し夕間暮れま白きままに心にとどむ

台風の激しき雨に洗はれし東の窓に淡き満月

百パーセントの丸になりたり八時十三分私の窓の中秋名月

自らをお供え物とまん丸の月に向かへりおとなしくして

来客はお月様にて私の食卓はなやぐ白ワイン添え

## 盗人萩

豊川 弓谷 久子

牧水の歌に魅かれし日もありき我が若き日の感傷なりき

一滴も飲めぬ身なれど牧水の歌に酔ひゐし我若かりき

道端の草にひそみし盗人萩の小さきくれない小さき萩よ

眠られぬ一夜明けたり台風はかくも間近に上陸せしか

台風の目に入りしか束の間のこの静けさの薄気味悪し

吹き返しの風未だ強し一日一夜荒れ狂ひつつ台風過ぎぬ

吾が生れしは九月十三日嵐の朝と父の言葉の又甦り来る

少しでも大人びしかみさとより長生きしてねと誕生祝い

少しだけ廻り道せむ御津川の土手彼岸花眺めて行かむ

墓参りもすべて子等に任せたり秋の彼岸の今日御中日



## 山里

新城 青木玉枝

老いて知る季の流れを背にうけ今宵十五夜仲秋名月

去りしつばめ秋の訪れ間もなくにわが軒の巢に帰る日を待つ

紅き雲流れ流れて夕暮るる山里にまた静かな夜が

網戸より涼風入りて今宵また安らな眠りに誘いくるる

怒る事も笑ひも悔も去りし今この山里に安らに眠る

眠りには庭よりきこゆる虫の声いやされており秋の夜長を

流れ星の南へ走る山里に都会を恋ひて立つ今宵

こほろぎの暁アカツキ知らす声の張り一きわ耳に眼をさましたり

初めての長き田舎の朝夕は目にとるものわれめづらしき

涼風に洗濯ものはゆらゆらと早くもかわく秋日和なり

## 故郷へ帰るか

東京 佐藤喜仙

菖蒲田に一番花の萎れれば菅笠深く摘みゆく女

いづこかで季節はづれの風鈴がすずしく鳴る音書見の耳に

諸掘りに子供をつれて行きたれば帰りのリュック肩に重たし

遠雷に犬はすばやく隅に行き耳をピンとたて身がまへてをり

行きつけの飲み屋灯れば絶品の芋の煮付で今宵も一献

深酒の遅き帰宅に妻はすぐあつあつの粥テーブルに置く

若い娘があじさる模様の浴衣着てこのごろ多し花火見にゆく

あふぐより小道具として持ち歩くことの多かり秋の扇は

書に倦みて夕の窓より外見れば夜の街へとぼつぼつ灯る

北へ飛びゆくかりがねを仰ぎ見て三十路過ぎたれば故郷へ帰るか

## 台風

豊川 内藤 志げ

待ちし雨沙羅の雫の降るごとし障子の窓より雨をたのしむ

植ゑ穴を大きく掘りてなみなみの水を注ぎてかんらん一畝

抱き畝にキャベツ白菜並べ植ゑサンサンネットの覆ひしつかり

通り雨されどよろしも白菜の微か緑芽もみがらの上

窓を覆ふビニール今日は外されぬ常なる風をしみじみとして

窓に寄りテレビを見つつ十八号台風の動きうから五人と

若竹は獅子の頭を振る様になびきなびくよ大きく靡く

カーテンを開きて覗くその刹那雷ひびく轟き響く

葱の間の乾きし土に草かきを引きて一本溝を作りゆく

デルデルのホースを引きて水を打つ静かに沁みるよ何処まで沁みる

## 母の面影

岡崎 林 伊 佐 子

粗食にて逝きませし母の面影よかの日の如く彼岸花咲く

平和の世に戦後の飢餓も幼な日の思い出となる七十路のわれに

子を思ふ親の心を詠みましし三十路の母の遺歌集しのぶ

農耕に夢追いながら生きて行く七十路の身には喜びとなる

つゆくさの花にも似たる空の色猛暑の記録は日々更新する

大根と人参の種を蒔き終へて野菜の影に暑さをしのぐ

西空にあかねに燃えて沈む陽に仕事を終へて農具を洗ふ

帰省してひとり山道を登りゆく土やはらかに足跡くぼむ

思はざる方かたに家居もあるらしき村のはざまに灯またたく

週末は庭の落ち葉を掃く夫と労りあひて古家を守らむ

## からす瓜

豊川 安藤 和代

夕空は秋を告げをり鳥一羽去りゆくあとの淋しさのあり

唯ひとりの叔父も逝きたりうら悲し夕やみ淡くからす瓜咲く

四十余年愛など語る事もなき夫がコーヒー入れくれし今朝

留学に発つ孫を今送れたり喜び寂しさ涙はむらさき

昨夜の雨ふふみてたわむ萩の花そそつと風がこぼして過ぐる

苦瓜のオレンジ割れて真紅なる種ポロポロと秋深みゆく

病状も落ち付き娘の窓遠く色づき初めし稲田輝く

「肉がいい」「魚がいい」と孫等言ふ意地悪バアチャンうどんに決める

苦し時も悲しきも吾を支えくれし短歌のありて力湧きくる

蝶ひとつふわりと消えし庭木ぎを揺らすは早も晩秋の風

変わり行く日々  
大阪 伊藤忠男

秋なのにビル壁挟む地獄谷陽沈みても汗が噴き出す

朝方の涼し風には騙されぬ今日も体温超える暑さに

ヒグラシに眠り覚まされ今日もまたその日ぐらしの一日なりや

目覚めてもまだ夢うつつ虫の音を床で聞きつつまた目を閉じる

熱帯夜猛暑日続く日々なのに庭に虫の音秋忍び寄る

秋はもうそこまで来たか蝉の音に取って代わりし虫の鳴き声

ろうそくの炎は赤くなほ赤く輝き増すは燃え尽きる時

朽ちかけた古き看板風受けてカタカタ鳴らす秋の夕暮れ

七十を超えれば違い身にしみるそんな外野の声聞き流し

この空に今も漂う汚染物雲無き夜も霞む名月

## 彼岸花

豊橋 胃 甲 節 子

彼岸花彼岸入りにて一輪が咲きて沁じみ季節を知りぬ

晴れ渡る中秋の名月沁じみと両掌合わせてしばし祈りぬ

母逝きて一人となりし吾が甥は如何ばかり淋しく月を仰ぐや

晴れ渡る空へ桜の木未にて百舌の一声高くひびきぬ

法師蟬しき鳴く朝よ爽やかな秋の空気と変りてゐたり

宇連ダムに十八号台風にて充分に水溜りますやふ只菅祈る

姉の葬り終へて甥より電話あり優しく看取り呉れし甥なり

姉逝きて魂抜けし如くなり何もなし得ず過ぎてゆく日々

頼り無く強き眩暈の後なればよろよるとつかまる此の頼り無さ

何日になれば不安拭ひて洗髪が出来るかと思へばほとほと哀し

## 漁火

沼津 鈴木孝雄

夏の夜狩野川堤をゆきかえる歩くも女性走るも女性

坂道を漕ぎ上がるよう漁火が駿河湾から我取り囲む

囲碁塾を変えて対局初対面棋風変われば挑戦新た

プロ棋士の石を打つ手の美しさ力強さに基本教わる

静浦港を取り囲む舟二十数艘太刀魚よりも漁火多し

静浦港台風予報何処へやら太刀魚狙いで釣り人溢ふる

台風去り海はいまだに濁れども空はすつきり富士青く立つ

台風で木々の葉っぱは茶ばめども黒松の葉の緑鮮やか

空苳菜摘んでも摘んでも新芽伸び東南アジアの活力の様

赤とんぼ飛び交う下で野菜育て自然に溶け込み暫し忘我す



## 紅白饅頭

春日井 清澤 範子

堤防の桜葉黄色に変わり来しそよふく風にハラリ舞ひたり

八王子神社へ午後の参拝なりちよつぴり秋風快よく吹く

堤防の諸草繁るを刈り取られ草の匂ひする吾が通る道

吾の手を引きつつスーパーへ来てくれる娘はヘルニアにてMRIを撮る

入院の娘を見舞へば点滴中終ればリハビリ廊下を歩くなり

プレゼントの眼鏡をかけて神社にてやさしい娘の快復を願ふ

ヘルニアの病に点滴打つ娘ベットの横にて見守る吾は

夫八二歳吾七五歳敬老の日は台風にて一日早く戴く紅白饅頭

狭窄症を手術したる夫と腰痛入院した娘一日一日と頑張り生きる

今日一日無事暮れました浴室に入れば秋虫音色盛んに

## 中秋の

東京 足立晴代

五輪の輪国を背負いて夫々に巧みに語りし外国の言葉  
不自由な身体をものかたと語り終えたる大和撫子

ゲリラ雨去りたる後にすゝきの穂静かにゆれる秋日和かな

中秋の明るき光月の影供えし餅のさぞうましとぞ

嵐過ぎ秋日和となりて被害地に心強しボランティアの姿

天災の続く各地の被害をばテレビで見るとみなさげなき吾

十五夜と満月重なりし名月は次なる訪れ七年後とは

秋風の涼しさ樹々の枝々にやさしくそよぐ白き花にも

日の本のこぞりて待ちし甲斐ありて歩めはじめし五輪への道

山々の紅増すころは何時の日か去年の日めぐりあらため見たり

## 月下美人

東京 富岡 和子

兎らは蚊帳に逃げき雷さま今日は竜巻原発全き

炎暑と台風さりて夏花はのこぎり草を残し長月

山並みは高く高し色付く田車窓に見えゆくみちのくひとり

被災の地福島訪ね若冲展除染の札は植え込みのなか

あかね雲蠅螂の背に映りいて季節知りつつゆったりゆくり

かまきりの大きなまなこゆるやかに時計草のうえ静かな夕辺

名にし負う月下美人のましろきは芳香と光望月夜半

かぐわしき月下美人の花咲きてとなり人らと十五夜の宴

彼岸花時節到来咲きそろう姉弟五人が谷中に集う

ガラス拭く雨もよい朝しつかりとピンポン玉大柚子の実青い

## 大相撲

名古屋 近藤 映子

我夫の発熱降れば穏やかな顔に吾をジツト見つめぬ

八月の始めの発熱に気をもみし今日は夫の穏やか良ろし

夫見舞いやはり共にTV見ぬこの一時はホツトする時

雨降らぬ八月末に成り来たる水まくベランダ亀は動きぬ

雨止めば宵には川の泥水減り我家の亀はのそりと動きぬ

残業の娘待ち居る八階に虫の声しきりに宵闇に響来ぬ

わが夫は九月十二日に救急病院より療養病院へ戻りぬ

大相撲始まりたれば我夫にTV見せたし急ぎ行く

わが夫の見舞いも出来ず「うがい」をす咽喉の炎傷おさまらず

刻々と夫の余命は過ぎてゆく色付く楓散り行くを見て

## 白玉星草

新城 半田うめ子

やさしきの孫の誘ひに浜松へと自動車にて行く幸せなりぬ

眺めしの白玉星草楽しみて遊歩道を行きし思ひ出すなり

誘はれて浜松なりしのサゴーへと楽しかりしの温泉にひたる

彼岸花黄の色なりしの川辺にて眺めつつ友と歩き行くなり

落ちてゐる赤きハンカチ十円の玉の二つ入りて居りぬ

耳も悪く眼も悪くなり老いて今八十さい過ぎて生きる幸せ

猫も犬も何故か動物嫌ひをり中高年の夫婦居りたり

やさしきの生徒行くなり鳩を見て喜びて居り笑顔を見せて

風の強く東の杉の葉の舞い落ちる国道そひに多く舞ひ居り

## 幻想交響曲

豊橋 伊与田広子

N響の最後の演奏曲目はベルリオーズの幻想交響曲

曲の中ベルリオーズの気持など幻想交響曲に秘めらる

アンコールの拍手なり止まずビゼーのアルルの女から一曲

この夏は異常に暑く熱中症ならぬようにと家に籠りぬ

籠りをれば足の弱りを感じずなり階段利用にて上り下がり

町歩き次々我は追ひ抜かる年の精かと淋しく思ふ

今我の一番悩むは字を書くに柘目わからじ困りいるなり

われ思ふ頭もみたれば目も良きかと頭もみつつ歌稿書くなり

八十を過ぐれば経験豊かなり考へながら暮して行かむ

今ならば何時水遣るも良きと思ふ思いたつたらやるが良きか

## エフェソスの遺跡

蒲郡 杉浦恵美子

エフェソスの遺跡に坐る夫が居る卓上カレンダー 九月の絵柄

我が夫の写真集めて作りたる今年のオリジナル卓上カレンダー

念願のエフェソスに立ち微笑める夫五十二歳永遠にこの歳

我が夫のやや掠れ声今も尚耳に残れど姿は見えぬ

思ひ出の木篋なれども時経れば手応へもなく壊れて仕舞ふ

我が為には甘口されど夫ならば迷ふことなく辛口の酒

豊橋の食卓向ひに夫が居て酒呑む様子まざまざ浮ぶ

籠一杯採ればよしと致しましょう棚の上まで狙うは危ない

この夏の暑さよ我が家の葡萄さへ一粒含めばほんのり甘い

二日掛一瓶仕上げし葡萄ジャム我の初秋の歳時記とせむ

## 茶 席

豊川 平松裕子

穂の青き矢羽根芒と銀水引の床を拝して稽古の茶席

ただ海の遠州灘の沖つ方白波立てり波高き今日

高速を走れる我を誘ふがに芒は靡く白き穂ゆらし

先へ先へと芒の白き穂は靡く高速道路の脇のなだりは

朱の刷毛で引きたる如く棚引ける夕焼け雲に向ひて帰る

手招きし我を呼びぬしその姿訃報を聞きて蘇り来し

この一年一番の客となりてぬし君が再び来ることはなし

骨董を語りてくるる人のまた現うつの我の前より消えぬ

鷺草の百鉢余りを残ししまま君は逝きたりただひとりして

食べれぬと言ひぬしままに食べぬまま逝きにし君よただただ虚し



## 面影

豊川 山口千恵子

干天に乾ける地を割き出できたりキツネノカミソリ今年は二本

出穂の田の面吹きくる朝の風清々青き香りを含む

出穂の稲田の中の道を行き歌碑は何処ぞ萩原神社

日のほてり未だ残れる畑土に分葱の球根埋めゆくなり

さらさらと乾ける土に畝を立て九月十日大根を蒔く

庭隅のいつもの所に今年またツルボ一株紫の花

株分けて母より貰ひし女郎花つひに絶へたり黄色の花は

彼岸花田の畦道にあかあかと植ゑし媼にこの頃会はず

先生の歌集「スモン」読みゆけば野添の道ゆく面影の顕つ

たどたと桃子に送るメール打つ彼の地は夜なり眠りてをらむ

## いつの間に

豊川 小野可南子

えのきの木の葉こそ玉虫の食となるパソコンに調べたと少年は言ふ  
まひがしにくれなるまるまる朝の日よ思はず知らず<sup>をろが</sup>拝む我が

やややに朝明け遅きこの日頃慣ひとしをり膝の屈伸

待ちて待ちてやうやくの雨は洪水の警報伴なふ台風十八号

我が庭の一なる揚梅<sup>やまもも</sup>その緑容赦もあらず吹きちぎる風

我が御津のこの辺りならむ台風の通過進路のこの静寂は

大小の鉢植ゑ倒し花を折り我が庭みどり乱して去りぬ

疾く疾く過ぎてゆきたる台風よ今宵十三夜月すがやかに照る

朝空の青を透かせる半月を横切りてゆく白鷺たをたを

いつの間にかツクツクオーシの声聞かず我が庭に鳴きしは八月半ば

## 詮方無し

豊川 夏目勝弘

松の葉を食ひ枯しゆく松毛虫殺さねばならぬ庭師の我は

松の枝剪りゆく鋏に割きてゆく松葉の色のわたの出できぬ

我が命と同じ命を殺すこと詮方無し詮方無しと

当地にはカッコウ類の渡りこず毛虫の天敵は人間のわれ

整枝終へ清清なりし松が枝に山鳩しばし含み鳴きをり

のっそりと線路を歩むカメムシの命危ふし電車入りきぬ

放射能おそれ攻めるも詮方無し親が幼子殺すはいかに

空を飛ぶ夢みることのなくなりぬ二十四時間自分の時間

先史より争ひ絶えしことはない憲法九条にその効ありや

満月の月見は久しぶりなりと庭師に疲れ早ばやと寝る

## 平和ぞ

横浜 阿部 淑子

窓ぎわにすすきお団子供えたり月はさやかに我が家を照らし

竜巻や大雨洪水崩落と氣象見舞か名月月光

昔より子孫こまごと共に手を合せ祈りし月は今日も輝く

壁塗りの大布たれしマンションに餌あげられずあわれ雀等

国々の鍛えし技を競い合う東京五輪目ざすは平和ぞ

## ラカン楨

豊川 白井 信昭

培いて山に還せしラカン楨この夏の暑さいかに耐えうる

中島の地所の低きに畑して黄瓜西瓜茄子葱とまと

散歩するわれの後先に赤トンボ空氣の階段上るごと飛ぶ

エアコンはほどよく効きて静かなり推稿はかどり最後の一首を

容赦なく頭上に滴る雨滴すべからくして止むを待つべし

# 贈呈誌

△高知アララギ

九月号

矢野

栞

一人の咳一人の足音一人言一人住まいは何にも一人

△秋田アララギ

記念号

安濃 ルリ子

△冬雷

九月号

吉田 綾子

長き髪たばねて厨に立てる孫表情ゆたかに卵溶きをり

「終の地の様子をちよつとみてきます」天にゆく友は辞世遺して

△愛媛アララギ

九月号

高津 明児

△柘

九月号

勝木 四郎

三日月を仰ぐは何年ぶりならむ足病む我の外に出るなく

単純に詠めとさとされし紫水館の歌会しみじみ思ひ出だせり

十月号

宮田 規子

△群山

九月号

山家 常雄

草や木やごちやごちや生ふる子規庵の庭に蚊遣りの煙り漂ふ

ツワブキの広き葉群に黄の斑あり夏の光りの及ばぬ木陰

△鹿児島アララギ

八月号

月精 薫

△檜の木

九月号

塚本 明夫

どくだみのほのかに匂ふこの朝甘藷植ゑむと畑耕す

竿渡し日除けのシート張りをへて早く来ぬかと曾孫らを待つ

九月号

有島 道子

△穂の原

九月号

松井 花子

夕立が過ぎればふいに群れとなる蜻蛉は何処に潜みてゐしか

盆終へて誘いくれし家族等と見たかりし映画少年日を

『いじよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

茂吉像の斜め後ろにそつと寄る真向ひに巨き緑の蔵王

「寫生道」と掲げられたる記念館このひとすぢの茂吉を思ふ

牧原正枝

「鳳来館」大正ロマンの香りするカフェー「夢二」等の画集そのままに

すれ違ひしダンプの運転は女の人ハンドルさばきが見事と夫は

岩瀬信子

はやばやと槌音響く夏の朝隣の敷地に美容院建つらし

蒸し暑き残暑のつづく長月の歌会の席にジャスミン茶香る

石田文子

幼な児の作りし小さき香袋わがハンカチの移り香ほのか

ひととせの夏の一日ひとに若きらと七人集ひてはずむ声々

山崎俊子

梅雨空の下に佇む喪服の人凜としてその姿美し

菩提寺の鐘楼の址に鐘楼なく今日の夏日に照らされてをり

水野絹子

今日のわれ完全防護の姿して庭木の中の蜂の巢取らむとす  
対岸は真黒なる雲に覆はれて稻妻光り雷鳴轟く夕べ

牧原規恵

紅の宮城野萩の花零し久しぶりなる風吹ききたり  
つづれさせ綴刺せよ鳴くごときチチロの声を聴きつつ眠らむ

三田美奈子

亡き友のはやも一年の命日か今宵降る雨のしとしとの音  
生業を終ひてはやくも七年に耐震工事のやうやう終はる

稲吉友江

柳川に水路巡りて着きにけり見えくるは白秋土蔵の海鼠壁  
東京の子どもらは今帰りたり窓に今宵の上弦の月

鈴木美耶子

夏の夜の庭に涼みゐる夫と我にうれしき便り息子より届く  
わが幼な御先祖様と言ひながら拝ろがみし今年の盆供養かな

吉見幸子

『俳句』

喪の家の煌々とあり秋の雨

植村公女

団十郎てふ朝顔の大き見得

幌深き乳母車ゆく萩の雨

闘病の峠越えるや栗ごはん

一石

突風をいかに耐えるか赤とんぼ

誠実に生きたか自問原爆忌



『かさね』の一句 十月号

電柱の影に身をいれ汗ぬぐふ

佐藤喜仙

風吹けど知らぬ顔して眠り草

松本周二

網繕ふ苔屋の傍に蚊遣香

古川千鶴

川床涼み闇深くなり宴猛る

川井素山

床の間の盆梅賞でて一日暮れ

安藤虎醉

涼風や野道歩きて花を摘む

田島昭久

その上の遠流の地なり沙羅の花

長久保郁子

秋茄子嫁の手に為る一夜漬

小池清司

蓮咲いて鯉の跳躍城下町

山本草風

鈴虫の音色を背に夕餉かな

青木英林

出発を見送るホーム夕月夜

岡野安雅

夕立ち来てのれんくぐれば一会の酒

丸山酔宵子

片蔭を拾ひて老女歩が弛み

田中清秀

片蔭に入りて見上ぐる空眩し

池内とほる

店先の木賊涼しや甘味店

和田勝信

練り歩く氏子の額秋暑し

小柳千美子

午後のバス日影変りて席暑し

森岡陽子

難しきことは勘弁この暑さ

橋本修平

蝉の幼虫登る力の高さかな

柳田皓一

熱帯夜足で蹴飛ばす寝具かな

後藤克彦

夏富士に群がる人の蟻の如

長島清山

涼風の渡る湖面や関所跡

吉田博行

## 私の一首

眠りには庭よりきこゆる虫の声いやされており秋の夜長を

青木玉枝

入所して馴れない中に早一ヶ月半、初めての体験ばかり都会の人と違ひ田舎の老人の集りから、独居の部屋は侘しきより安らぎの部屋で、玉露の草原を歩き、鈴虫のこんなきれいな声身近にきける秋の夜長、わが残生への日びされどあの都会の雑音がたまらなく恋しい一刻もあります。九十年を振りかえりしみじみ秋の夜長を夢路へ付いております。

やと春手に取り愛でるタンポポに菜の花すみれ名もしらぬ花

伊藤忠男

退院し心身を癒すため和歌山にある別宅にきた。それまでは冷え込みの厳しい日もあったが、こちらに来たら暖かい日差しに包まれることが多く、里山も一気に春めいてきた。暗くなりがちであった心も、自然と明るさを取り戻してくるのがよくわかる。今日は気分よく、久しぶりに熊野古道を散策。道端にはいろんな春の花が迎えてくれていた。そこにはよく見る花もあるが、片隅で咲く紫色の花は名前を全く知らない。でも、風に揺れ、語りかけるような仕草に、何とも言えぬ愛おしさを覚えた。まるで、私の回復を祝ってくれているようであった。私自身にもやと春が来たのだ。

麦秋の色美しき眺めにて短かき散歩に満てるしあはせ

胃 甲 節 子

散歩の出来る事は、滅多になくて、それも往復二千歩を、杖を恃みに、ゆつくり歩く位の情無い有様ですが、下条の広い田圃の田植えが終ったかどうか見たいと出掛けた時に、知らない男の方が眺めて居るので、挨拶して「田植が終つてきれいですネ。」と申しますとその方は「小麦畑の色の方が見事だネ。」と申されました。暫くの間本当に美しいと眺めていました。知らない方でも美しさの前では、もうすぐ収穫だと思ひ満ちたりた短い時間でした。

君とわれ蒲郡駅にて別るる時アキツ飛び舞ふを見てゐたりきに

岡 本 八 千 代

ある朝、庭に赤トンボがいっぱい飛び交っていた。今年のアキツだ。

「君」とは青木玉枝さん。三年ほど前に一度蒲郡へ立ち寄られたことがあって、その時会うことができた。もう夕暮時であった。彼女は伊丹へ、私は西浦へと帰ろうとした時、蒲郡の駅前広場にトンボがあちこち飛び交っていた。二人でしばらくそれを見ていたのだった。——朝見たトンボから、別れの時に見たトンボへと私の心が動いてできた一首。

## 「歴代天皇御製歌」(十七)

貫名海屋資料館

『元正天皇』第四十四代・女帝・在位七一五年(三十六歳)―七二四年(四十五歳)

元正天皇は、天武天皇と持統天皇との皇子草壁皇子を父に、母は天明天皇。はじめて独身で即位した、慈悲深く、美しい女性天皇。母から子へと女系での継承がされた。

この御世、天武天皇の皇子、舎人親王が日本書記を撰上。天武天皇以来の國史編纂の志を受け継がれた。藤原不比等が中心になり、「養老律令」の編纂がはじまる。

はだすすき尾花逆葺き黒木もち造れる室は万代までに

(万葉集 卷第八)

皮つきの黒木を用い、尾花を逆さまに葺きにして造ったこの家は万代まで栄えるでしょう

玉敷かず君が悔いてふ堀江には玉敷き満てて継ぎてかよはむ

(万葉集 十八)

玉石を敷いておかなかつたと悔やんでいう堀江には、私が玉石を敷きつめて、通い続けましょう。

## 「歴代天皇御製歌」(十八)

貫名海屋資料館

『聖武天皇』第四十五代・在位七二四年(二十四歳)―七四九年(四十九歳)

聖武天皇は、草壁皇子の長男。この頃より藤原氏の勢力が強大になる。渤海国がはじめてわが国に朝貢した。聖武天皇の光明皇后は、施薬院、非田院を置かれ、病弱者、困窮者の救済をされた。天皇は「鎮護国家」から「国分寺、国分尼寺建立」、東大寺盧舎那仏の建立の発願をされた。天平時代、聖武天皇を中心に、山部赤人、大伴旅人、山上憶良…の歌人が輩出された。鑑真の来日。

今朝の朝明雁が音さむく聞きしなへ野辺の浅茅ぞ色づきにける

(万葉集 八)

今朝明け方は、雁の鳴き声ガ寒々と聞こえてきたが、野辺の浅茅は色づいたことよ。

橘は実さへ花さへ葉さへ枝に霜降れどいや常葉の木

(万葉集 八)

橘は、実も花も葉も、枝に霜が降ることがあっても、ますます栄える常緑樹です。

## ある自然科学者の手記 (18) 大橋望彦

### 『イマジネーション』②

『オノマトペ』と言う耳慣れない言葉があるが、これは、古代ギリシヤ語の *onomatopoeia* を由来とする英語の *onomatopoeia* (アナマトピア) 、或いはフランス語の *onomatopoeia* (オノマトペ) を起源とした外来語で、擬音語と訳されている。要は、ものが発する音を字句で模倣した表現型であり、生物の発生する音は擬声語で、その他の表現を擬音(態)語とも云っている。このオノマトペで先の雨の表現はどうなるのかを考えてみた。例えば、

霧雨(モヤヤー)、小糠雨(シトシト)、小雨(パラパラ)、時雨(ビシヤビシヤ)、俄雨(ザアー)、地雨(ザ、ザアー)、村雨(シヨボシヨボ)、村時雨(チヨロチヨロ)、横時雨(ビシヤビシヤ)、通り雨(ザアーツ)、スコール(ザーザー)、豪雨(ジャンザン)、雷雨(ドシヤ)、風雨(ビシヤビシヤ)、長雨(ジャンザン)と余り適切でないかもしれないが、色々な表現が出来る。その他、夕立とか氷雨とか梅雨という季節感が直ぐ伝わる雨もある。このように、雨という、気象を一つ取り上げてその微妙な表現型が存在するのは日本のみであり、その表現型は身体で憶えるもので、教育ではない。しかも、どんな場合でも通じ合える言葉として存在している。外国人でも日本に長く住んでいると、自然と身についてくる。日本人が誰でも使う言葉であるからである。只不思議なことには、外国にも同じようにオノマトペが存在しているが、日本程多くは無く、また、その感覚も異なっている。

キツネは日本では『コン、コン』と鳴くとされているが、米国では『イヤツプ、イヤツプ』と鳴くという。尤も、日本で始めて、奥多摩の里山で鳴くキツネの声を『クワツ、ク

ワツ』と聞こえたが、それが『コン、コン』であり、『イヤツプ、イヤツプ』なので、是はどちらとも云いようがない。でも、鶏はどう聞いても『コケコッコ』であつて、『クックドウドルドゥー』とは聞こえない。しかし、昔の人は良く言ったものである。鳥のコジュケイは「一寸来い、一寸来い」と鳴くといったが、本当にそのように鳴く。それ以外には聞こえない。探せば、そのような擬声語は沢山あるが、実に良く出来ている。ドキツとする事も多々ある。こういう事を題材として研究している国文学者も多いことであろう。

研究の種子は尽きそうも無い。兎も角、ある音を聞き、その音に忠実な再現性を求めて作られた擬声語は正にイメージ作りであるが、このイメージがどんなものなのか。感覚器が捉まえた電気信号が、脳を介して文字・字句となり文章となる。その文章を読むことで目から見えた文字が脳を介して電気信号となり、その信号は解された文字の意味を音に再現させる。その再現された音からのイメージが表現型として映し出され、感じ方が伝達された事となる。この伝達されたイメージは、ピタリと共感を伴なうものでなければ意味が無いのが微妙である。このようなオノマトペが微妙な心理を伝える役割を果たしているとする、実に不思議に思える。一寸でも違った字句では再現出来ない。扉の開閉音一つでもそのニュアンスが異なる。『スーツ』と開くのは引き戸であり、音も無い態が映し出される。『サアーツ』となると勢が増す。『ソーツ』と音も無く閉まるが、『ビシヤリ』と勢良く閉まる音には怒りが込められる。『ヒラリ』と開くのはドアであり、『ガシヤツ』とドアノブが閉まる。『パタン』と、音を立てることもある。これらの事が一字でも異なると、とんでもない事になる。『ズーツ』と開くのは、開きばなしの戸であり、『サーツ』と閉めるのは埃だらけの敷居の引き戸の様子となり、『ゾーツ』と閉まる態は気持ち悪く、『ビシヤリ』



と閉める戸には怒りというより気概が伺える。「ヒラリ」でなく「グラリ」は危なかしい。「ガシヤツ」が「カシヤ」では軽金属音となり、「バタン」が「パタン」でも軽く閉まる音となる。こんなに表現型が左右しているのである。

詩歌の世界は、もつと難しく、小生のような素人には解しようも無くなる場合も生じてくる。詠み人知らずの詩が、何故伝わるのかは不思議である。本当にその詩を詠んだ人が感じたことがそのまま現代人にも伝わるのかは、誰も立証しようにも無いのに、判るのである。チャンと伝わっていると言えるのである。それはイメージであるから、誰がどうイメージしてもそれで伝わっていけば良いのではないかと、勝手に、無責任に解している。是はお叱りを受けるかな。

『イマジネーション』には感覚器が関与する。それも、眼に映るものから画像が創られることが多く、それと耳から聞こえた音によるオノマトペがそれらの代表となるであろう。この眼からの映像も実像、虚像と、ややこしい。本当はどっちなのかは、いまだに判らない。それでも実に感心したこと最近体験して判った。

それは、白内障の手術をした時の事である。感覚器である眼球中の水晶体にタンパク質の変性物で曇りを生じ、その乱反射により物が鮮明に見えなくなる。したがって、手術をして、その水晶体にあるタンパク質の変性物を粉碎して取り除く操作をする。その後、水晶体にレンズを植え込み、取り出したタンパク質の空間を充たして、元の形に復元する一連の手術である。勿論、局部麻酔により、痛みを感じないようにして行なう。という医師の説明を聞いて、納得して行なわれた。しかし、眼の手術は初めてなので、やはり不安ではあった。麻酔の注射が打たれるとき、少し気持ちが悪かった。いきなり眼球の横に注射針が入るのであるから、不安になるのは当然である。それでも次に、メスで切るのが見える。しかも、

サクサク切れる音も聞こえてくる。医師が何やら小声でブツブツ言いながら手術が進行する。兎も角ライトが眩しいが、仕方が無い。其の内、メスの先が鮮明に見え出した。切っている。そして、カリカリ変性タンパク質を削っている。その様子が見えている。暫くすると、今度はピンセットの先が本見えて、水晶体だかレンズかを押し付けられているのが見える。チョン、チョンと2本のピンセットの先が押すと、何か液体の様な物が動くのが見える。そして、縫合が始まった。プチツ、プチツと、縫合糸を切断する音も聞こえる。やがて、医師が手術の終わったことを告げた。約一時間半の手術であったが、肩が張った。見事な手捌きであったと思う。細かい仕事である。こんなに手術の手順が全て見えているという事は知らなかった。まるで人事の様な気分である。暫くは明る過ぎるので金属に沢山小さな穴が開いている眼帯が掛けられない。薄つすらと外が見えている。ガーゼのような物もしていない。確かに出血でもしているならば必要かもしれないが、それは困る。手術は無事成功していて、終わっているのに、眼帯だけでよいのだ。後は、感染を防ぐのと、傷口が塞がるまでの間は、消毒の目薬で洗滌するのみである。大して痛みを感じる事も無く、苦痛が無いのが不思議な気持ちすらした。眼が再び元の様に見えるようになったので、『イマジネーション』が、どのように変わって来るのが、楽しみになってきた。

### ◎訂正

「富士山のように」40ページ最後から4行

鳩の巣↓鳩の森

「イマジネーション」①43ページ最後から6行  
振り方↓降り方

## 絹の話 (36)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

### 貝絹

絹は白い繭（家蚕）で作ると思っている人が多いですが、古来から世界中でその地域に棲息しているみの虫の様な野蚕の繭で衣服を作って来ました。それは素朴な毛布の様な物が殆どで、薄くてしなやかな物ではありませんでした。五千年も前に中国で家畜化された蚕を作り、製糸技術を見いだしてより柔らかく艶があり、透ける様なシルクが作られる様になりました。

地球上にはシルクを作る生物は10万種以上棲息しているといわれますが誰も正確に調べた人はいません。蜘蛛の糸や家蜘蛛の卵の袋、蜂の巣等地上では色々な絹が身近な所に沢山あります。水中でも実に多くの絹に出会います。フジツボなどが石に付着する成分、ムール貝の付着ヒゲ、真珠貝やアワビの艶やかな光沢部分、海の袋虫の袋等々シルクに満ちあふれています。

陸上の生物はかつて海の生物から進化して来たのですから水中に絹蛋白があっても奇異に思う事はないのです。

### 〈サルディニア島のビスス（貝絹）〉

イタリアのサルディニア島では今日でも地中海の巨大なイガイ目のタイラギ貝（30 cm ～ 120 cm）の岩に付着する何本も束になったヒゲ（10 cm ～ 30 cm）の部分を使って絹織物や編物を作っています。これは「ビスス」と呼ばれています。

何日も掛けてごみ取りをして、カード（繊維の方角を揃える）し、細い2本の糸を合わせて1本の糸を作り、ます。糸を作る途中（一般の絹糸作りの精練の過程？）でレモン汁を加えると、糸が金色になるそうです。

古くは貴族から庶民まで広く利用されていた様で、ギリシャ神話に出て来る黄金の羊毛とは、太く細いで毛糸の様な風合いになった金色に輝く糸の事ではないかと言はれています。

今日では、タイラギ貝を乱獲したせいか、海の環境が変化したせいか判りませんが、生息数が減少した為、伝統工芸を維持継承する目的で、現地の技術保持者で研究者のチイアラ女史一人に作る事が許されています。作られた作品は彼女の展示館に展示されるか、フランスのリヨンの歴史博物館等に展示され、一般販売はされていないそうです。

同じサルディニア島でも「ピシス」を作つて来たのは島の西南に住む海洋文化を持った、古くエイゲ海の方面から移住して来た人達だそうです。島の北東部は羊の文化を持った人達で、それぞれかなり生活習慣が異なるようです。サルディニア島に旅行に行かれる事があります。たらお訪ね頂き、話を聞かせて下さればと思います。

### 〈貝絹への考察〉

日本では貝絹を使つて衣類を作つた話は耳にした事はありません。地中海地域では1950年頃迄は他にも何人か製作者がいたそうです。どの様なきつかけから巨大なタイラギ貝のヒゲの様な部分を繊維として、これから衣服を作ろうとしたのか、浅い海で手軽に大量に採取出来るムール貝のヒゲ(絹)ではダメなのだろうか?どちらにしても貝のヒゲには目に見えないほど小さな稚貝やゴミが付着していてこれを取り除く為に気の遠くなる様な作業が必要です。陸上の植物、動物、昆虫繊維の方が遥かに取り組み易いと思われませんが、これを長い間作り続けて来させた原動力は何だったのだろうか?温かい、軽い、丈夫と云うだけでは説明になりません。また、いくら緻密な刺繍を施してもしなやかで艶のある蚕のシル

クの様なドレスには足下にも及びません。或はシルクの機能性(血行促進、抗菌性、保湿、保湿等)による快適さが神秘的付加価値を持ったのだろうか?

6世紀以前にはヨーロッパには蚕がいなく、絹が何から採れるものか判らなく、東洋から運ばれる途方もなく高価な品であつたようです。その様な物と比較すれば、生産性があつたのでしょうか?中性以前ならそれで説明も出来ませんが20世紀半ば迄経済的生産が行われていたのでその仮説は成り立ちません。

採取したヒゲを2ヶ月以上水に浸けておくという作業工程がミソの様な気がします。その間に付着物は死んだり落下して、意外にシンプルな繊維が簡単に取得出来るのでしよう。そうしたら他の陸上繊維と同じ作業です。

日本では手間ひま掛けた草木染めが高価に売れる事を考えれば納得です。

世界染料会議などでも、化学染料は廉価で大量に何時でも豊富な色域が染色出来るのに、日本人は草木染めなど経験と感を要し、染色の時期も限られ、不安定な仕上がりの方にどうしてこだわり、高い価値を見いだすのか、なかなか理解されないのと、貝絹の価値は似ていないでしようか。

## 物理学者と詩歌の世界 (46)

一石

### アーネスト・ラザフォード

アーネスト・ラザフォード (Ernest Rutherford、1871-1937) はニュージーランド出身、イギリスで活躍した物理学者・化学者。原子核物理学の分野で数多くの業績をあげ、「原子核物理学の父」と呼ばれた。ラザフォードはニュージーランドのネルソン近郊に生まれる。クライストチャーチのカンタベリー・カレッジを卒業(92)。同カレッジにて数学と物理学の分野で修士(93)。その後イギリスに渡りケンブリッジ大学を卒業(98)、同大学キャヴェンディッシュ研究所の研究員となる。J・J・トムソン教授(注1)指導のもと、気体の電気伝導の研究を始める。1907年マンチェスター大学教授となり「有核原子模型」や元素の人工変換の研究などを行った。その後はケンブリッジ大学教授、キャヴェンディッシュ研究所所長、王立協会会長などを務めた。

1908年にノーベル化学賞を受賞。最も重要な業績は、「原子核の発見」である(注2)。また、放射能が原子の崩壊によって生じること、アルファ粒子が電子を取られたヘリウムの原子核であることの説明や史上はじめ

て「元素の人工変換」を成し遂げたことなども受賞理由に挙げられている。

ラザフォードは世界各地から集まった多くの逸材を育てた。そのような科学者に、元素の特性エックス線の波長と原子番号の関係を見出し、それに基づき未発見の元素を予測したH・モーズリー、質量分析器を発明したF・アストン(1922年ノーベル化学賞)、霧箱を使った宇宙線の研究や陽電子の研究のP・ブラケット(1948年ノーベル物理学賞)、中性子を発見したJ・チャドウィック(1935年ノーベル物理学賞)、加速器を使った元素変換の研究をしたJ・コッククロフトとE・ウォルトン(1951年ノーベル物理学賞)、電離層の研究のE・アップルトン(1947年ノーベル物理学賞)、低温物理学の研究のP・カピッツァ(1978年ノーベル物理学賞)などがある。また、コペンハーゲン学派を形成して量子力学の建設に指導的役割を果たした理論物理学者のN・ボーアも若いころ、ラザフォードの指導を受け強い影響を受けている。

エピソード…

1) 肖像画はニュージーランドの銀行券100ドル紙幣の肖像に採用されている。また1997年にはラザフォードに敬意を表して、原子番号104の元素がラザホージウム (Rutherfordium) と名づけられている。

## 2

ラザフォードは学問的業績だけでなくその人柄と指導力により同僚の物理学者たちから深い敬愛を受けた。慈愛心に満ち、若い研究所員たちを「息子たち」と呼んで親しく接した。設備や計測機を開発しながらキャヴェンディッシュ研究所を大きく成長させた。また自ら財界から寄付を募って、研究所の予算を4倍にまで伸ばすなど組織の運営・管理の面でも優れた手腕を発揮した(参考資料2)。

## 3

キャヴェンディッシュ研究所時代の弟子のうちお気に入りは、ロシア人物理学者ピョートル・カピッツアであった。彼は始め、ソビエトとイギリスとを自由に行き来していた。しかし、物理学者の重要性に気付いたソビエト政府は、1934年彼を渡航禁止にした。ラザフォードはそれに抗議の手紙を出した。それに対する返事には、「イギリスがカピッツアを欲しがっているのは理解できる。我々もそれと同じくらいラザフォードを求めている」とあった。英首相ボールドウィンの助力を頼んだが、無駄だった。カピッツアの親類の女性が、駐英ソビエト大使マイスキーに向かって、「うちのピョートルは頑固者だ」と脅すと、大使は、「我らのヨシフ(スターリン)はもっと頑固者だ」と返した。ここでラザフォードはどんな手に打って出たか。彼はなんとカピッツアのために、3つの財団の予算を使って建設した高圧の実験装置を、ソビエトに提供したのだ。これには

ソビエトも、3万ポンドの代償を支払ったのみならず、カピッツアのために、モスクワに新しい研究所を建てた。カピッツアはラザフォードに宛てて「我々は運命という大河の中を流れる一微粒子に過ぎない」と書いた(参考資料1)。

注1…電子を発見し、1906年ノーベル物理学賞を受賞。

注2…原子について考えるとき、小さな電子という惑星が中心にある原子核という太陽の周りを旋回するというイメージをいまも多くの人が思い浮かべるが、このような原子模型を提唱したのは1903年、日本の物理学者、長岡半太郎であった。それを実証したのがラザフォードである。彼はアルファ線を金箔に照射する実験を行い、大角度で散乱するアルファ線が存在から、金原子の中心部には「芯」、すなわち「原子核」の存在を発見した。長岡半太郎・ラザフォードの原子模型は、いくつかの難点があったが、後にボーアの原子模型によって一応解決されることになる。最終的な解決は量子力学によってなされる。

### 参考文献

- 1) Wikipedia, the free encyclopedia: Ernest Rutherford
- 2) 小山慶太『ケンブリッジの天才科学者たち』新潮選書



短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

## 十二 柴生田稔 2

今日の日に榮ある文のいさをしはせつなき君が日日  
になりにき

昭和十五年 『春山』

遠ちより師のよろこびに來し人の振舞ふさまも心に  
し沁む

茂吉が『柿本人麿』の業績によつて帝国学士院賞を受賞したときの作で、「榮ある文のいさをし」はその大著を指している。「せつなき君が日日」は、茂吉がこの大著に費やした年月が、折しも青山脳病院再建の苦しさ、夫人のスキャンダルによる精神的負傷等と重なったことをいうのである。なお、茂吉はこの時期永井ふさ子との恋愛中であり苦悩を伴うこともあったであろうが、このことは隠さなければならなかったから、真実を知っている柴生田も表現には用心したはずである。

宮中での午餐の後のことが茂吉の日記に「末はつニテ夕餐ノ馳走ニナル、結城君主賓」「結城哀草果、堀内通孝、山口、佐藤、柴生田ト予ト写真ヲ撮ル」とあるから、二首目の「遠ちより……來し人」は山形の結城哀草果、名

古屋に赴任中の堀内通孝のことであることがわかる。

みちのくに君をいませて戦ひに敗れしあとの年も移  
りぬ  
昭和二十二年 『麦の庭』

茂吉が戦火を避けて山形・金瓶に疎開したのは二十一年一月であったが、歌は大石田にいて敗戦の痛手を癒やす茂吉を思いやっている。

東京に君はいますと思ふだに心たのしく年ゆかむと  
す  
昭和二十三年 「アララギ」一月号

茂吉は三年に及ばんとする疎開生活を打ち切り、昭和二十二年十一月に帰京、家族の住む世田谷の家に落ち着いた。疎開中病気に苦しむ師を氣遣うこと度たびであったが、いま東京に「いますと思ふ」と楽しくなるというのである。

暁に目覚めし時にわが心つひにすべなし声に迫りて  
昭和二十八年 「アララギ」五月号

一昨年を思ひぬ去年を思ひぬ今更に悲しかりける君  
が経過

かくまでに君に縋りてありにしかただ力なし昨日も  
今日も

山草やまぐさにかかはることをわがために亡き先生はよしと  
したまはざりき 昭和二十八年 『麦の庭』

挽歌である。茂吉の死は昭和二十八年二月二十五日であつた。二首目は、心臓喘息の発作にたびたび襲われたこの一、二年の師の苦しみを思うのであり、三首目は、師を失つた後の空しさを「ただ力なし」と詠んでいる。四首目はやや難解だが、たとえば、自分や、もう一人の師である土屋文明をまねて「山草にかかは」つてももう新味はないからよしなさいというように解することもできよう。

手をとれば痛しと君は言ひまじきわれの見えしをは  
りなりけり 昭和二十九年 『麦の庭』  
君に似ぬ弱き言葉と聞きしさへ今いたましくよみが  
へるなり

茂吉の死から一年後のなまなましい回想である。永訣となつた日の茂吉のようすと言葉を思つて悲しんでいるのである。それから三十年後の昭和五十九年にはこのときのことを、「君つひに言葉なきときあふれくる涙を我は禁じ得ざりき」「君が手をわが取りしとき痛え痛えと君は叱りき最後なりけり」(『公園』)とも詠んでいる。

君が仕事手伝ひ果てむ一生かと嘆きたりにしことも  
思ほゆ 昭和三十一年 『麦の庭』  
年々に命過ぎゆくあはれさを全集といふ形態は示す  
六年は君の全集の仕事せりあだに過ぎしとわが思ふ  
まじ 昭和三十六年 『入野』  
胡桃澤勘内氏のこと調べあはれあはれ見落とし  
ぬし先生の歌一首  
全集の不手際を色々気づくなり年立ちゆきて愈々気  
づかむ

岩波書店から出る最初の『斎藤茂吉全集』の編集が始まつたのは昭和二十六年十二月であつた。担当は山口茂吉、佐藤佐太郎と柴生田である。一首目は、研究者としての本業をおろそかにして師の全集の編集に捧げる一生かと嘆いたこともあつたというのである。この三十一年にはもう三十余巻が刊行されていた。二首目は、個人全集という形態のもつ特徴を巧みに言い表している。個人の業績の記録を超えて「命過ぎゆくあはれさ」を示すと捉えたところに味わいがある。

三首目は、昭和二十六年から関わつた茂吉全集の最終巻(全五十六巻)が出る昭和三十二年七月までの六年間を振り返つての感慨である。下旬に単純ならざる思いがこもっている。四、五首目は全集の編集にかかわつた人が避けることのできない思いであろう。

## 楽しい時間 12

山本紀久雄

2013年9月30日

### 前期終了日

蕨市の「いーとびあ・辻照子先生の料理とマナー」の2013年前期講座が9月14日で終わった。まだ暑い中、汗ふきふき教室に入り、一番グルーブのテーブルに座ると、みどり監督が普段と違う雰囲気を見せている。そうか、今日は前期終了だから、いつもの定例セレモニー「全員一言感想」があり、気合が入っているのだ。多分、昨日から「何を話そうか」と考えてきたに違いない。目つきが鋭い。肩に精気がみなぎっている。

ということ、料理三品「ポークロール」「ポテトとベーコンのチーズ焼き」「野菜の Pasta サラダ」実習後、皆が食べ終わる少し前から「一言感想」が始まった。大勢なので一人1分という制限、みどり監督は特別に7分。

皆さんの発言を聞いていると、東京オリンピックのプレゼンテーションと同じだと感じる。勿論、国と国の闘いであった真剣勝負のブエノスアイレスとは中身が異なる。だが、辻教室メンバーの言葉からも、オリンピックのプレゼンと同質の想いが伝わってくる。

それは「素晴らしさ」である。オリンピックでは「日本の素晴らしさ」を伝え、日本で開催すればアスリートも観客も一緒に「楽しい時間」を過ごせるとPR。「いーとびあ」では「辻教室の素晴らしさ」を語り、メンバーが「楽しい時間」を体験できたことを強調する。その「素晴らしさ」というと

ころが、ブエノスアイレスと蕨の共通性だ。

### 南浦和事件

京浜東北線・蕨の隣駅、JR南浦和駅で2013年7月22日(月)、ある事件が発生した。乗客の30代女性が電車から降りようとした際、足を踏み外し、右足が電車とホームの間の約10センチの隙間に入ってしまった。ホームにはい上がろうとしたが、左足も落ち、へその辺りまで隙間に入ってしまったのだ。

転落に気づいた客がホームに設置された「列車非常停止ボタン」を押し、駅事務所から駅員が駆けつけ、2人の駅員が女性を引っ張り出そうとしたが、うまくいかず、別の駅員がとっさに車両を両手で押したところ、周囲の乗客や別の駅員も押し始め、その数は約40人に達した。「押しますよーせーのー」という駅員のかげ声に合わせて押すと、重さ約3トンの車両が傾き、ホームとの隙間が広がった。2人の駅員が女性を引っ張り上げると、乗客から拍手や歓声がわき起こり、万歳をして喜ぶ人もいた。女性に目立っただけはなく、駅員や周囲の乗客に「自分の不注意で落ちてしまい、ご迷惑をおかけしました。助けていただきありがとうございます」と深々と頭を下げた。翌23日(火)、南浦和駅の改札や階段に張り紙がなされ、ホームで異例のアナウンスが流された。「多数のお客様にご協力いただき、無事に救出することができました。ご協力いただいた皆様にご心より御礼申し上げます」この事件は、普通の日本人が咄嗟に發揮する「素晴らしさ」を証明した。

### 館山市の洲崎神社祭り



もうひとつ日本の素晴らしさを紹介したい。それは千葉県館山市の洲崎神社祭り(2013年8月21日)である。洲崎神社は、館山市の最西部、海にせり出した岬の突端に位置していて、洲崎神社本殿・拝殿へは、勾配30度急坂147段の石階を上る必要がある。一気に上るのは息が切れ、途中で一休みが必要となるほど。祭り当日の15時、拝殿前には白丁(はくちよう)姿の若衆と、見物の客が集まる。神社は御手洗(みたらし)山の中腹にある。

神社拝殿境内で白丁姿の神輿担ぎ手が、宮司からお祓いを受け、いよいよ神輿担ぎを始める。まず、拝殿前の境内を何回も神輿が勢いよく揉み回る。見物客も神輿の勢いに押され隅の方に追いやられるほどである。次に、いよいよ勾配30度の147石階段を降り出す。普通に降りても危ない急勾配、そこを重い神輿を担ぎながら、それも左右に揉みだして、下がるのであるから、白丁の担ぎ手は必死の形相、見ている方もハラハラ、洲崎神社祭りのハイライトである。

神輿は拝殿前での揉み時間を含め、約30分かけて石段を降り、隨身門をくぐり、そこで一旦休憩し、今度は浜辺へ行き、宮司が海に対する感謝の神事を執り行う。この一瞬のために大勢の白丁姿が大汗を掻いて神様を神輿に乗せてお運びして来たのである。時刻は16時を過ぎ、夕陽が沈み始



めた。この厳かな儀式を終えると、再び、147段上の神社に神輿を奉納するため、大勢の白丁姿が担ぎ始める。見ていかなと海に面した鳥居に入る前の道路、そこで揉みだした。なかなか鳥居をくぐらない。もうくぐるかと思うと引き返し、左右に動き揉み回す。見ている方が焦れるほどの時間を要している。ようやくリダーのかけ声で鳥居をくぐり、147段の石段を上っていき、無事、神社本殿前に到着した。17時半である。怪我人もなく洲崎神社祭りは終了し、白丁姿のまま、社務所の広間で真会、全員で「お疲れ様」の挨拶と乾杯。白丁姿全員の眼が澄んで、眼差しに満足感が漂っている。その中の一人に「あの鳥居の前で随分時間をかけて揉んでいましたね」と尋ねると「ああ、あれは神様と一体化する儀式で、憑依(ひょうい)ですよ」とさりげなく語る。これに息を呑む。思わぬ一言が出てきた。憑依とは、霊などが乗り移る一種のトランス状態をいう。神輿を担ぐことで、神を意識しているのだ。もともと昔から日本人は祭りと共に生きてきたので、それはとりもたず神仏と共に生きてきたことになる。

つまり、日本人は奥底の心情で、神仏と「つながって」で生きているから、いざという時、隠れていたものが咄嗟に素直に顕現・発現する人種ではないか。日本人しか分からない感覚・感情だろうが、これが「素晴らしい」国民性に結びついているのだと思う。

このように考えてくると、ブエノスアイレスの成功、南浦和駅の助け合い、洲崎神社の祭り、すべて日本人の素晴らしさが顕れた事例であって、同様に「いとびあ」も、辻先生の「素晴らしさ」が「楽しい時間」をつくっていると、皆が表現したのだと思っっている。

# 子規の短歌革新とアララギの歌人 (16)

佐藤 喜仙

## (三) 歌よみに与ふる書―第五回―

今月の要旨

### ①再び歌評四首

「心あてに見し白雲は麓にて思はぬ空に晴るる不尽の嶺」

春海なりしや

(イ) 白雲が麓というのはおかしい。あて推量で見たとしても少なくとも中腹あたりではないだろうか。

(ロ) 白雲は麓にての一句は理窟であり適切な表現ではない。

(ハ) この歌は不尽の姿弱く、不尽の高く荘厳な姿が読みとれない。

「もしほ焼く難波の浦の八重霞一重はあまのしわざなりけり」  
契沖

(イ) この歌の良い所は八重一重の掛合せにあるが、子規はその点に疑問をいさぐ。八重霞というものは八段に分かれて霞んでいる様を言うので、その最下層の一重と述べた点は理窟に合わない。

(ロ) 「あまのしわざ」は主観的であり、俗の感をまねが

れない。

「心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花」  
凡河内躬恒

(イ) この歌は百人一首に入っているので多くの人が知っているが、一文半文のneauちも無い歌である。

(ロ) 初霜が降りた位で白菊が見えなくなるとは誇大表現で、真実ではなくつまらぬ嘘である。

「鶴かぎのわたせる橋におく霜の白きを見れば夜ぞ更けにける」  
大伴家持

躬恒の歌は瑣細な事をやたらに大げさに詠んでいるが、家持のは全くない事を空想で詠んだ大嘘の歌であるが、それ故に面白い歌である。嘘を詠むなら全くない事、とつもない嘘を詠むのが良い。そうでないならありのままに正直に詠むべきである。

「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる」

「梅闇に匂う」とこれだけで済む事を三十一文字に引きのぼしただけの歌であり、内容が陳腐である。梅の香を詠んだ歌は古今集だけ十余首もあり、その後の梅の香を詠んだ歌は数えきれない。いいかげんで梅の香を詠むことは止めるべきである。小さな事を大きくいう嘘が、和歌腐敗の一大原因と思う。

# 富士山の短歌 (2) (卷三のつづき) 夏 目勝 弘

窪田平和 (三十六歳・和歌山)

○草原に臥して望めば蒼然と富士暮れてゆく草の穂の上  
に (富士裾野板妻にて)

栗原潔子 (明治三十一年生鳥取)

○晴れ極まり光けぶらぶ日おもての富士は消ぬがにほの  
ほのとあをき

卷四 (さ・し・す・せ・そ・の部) 776名

篠原志都兒 (明治十四年生・長野)

○駿河なる富士の頂見ゆるまで浅倉山を木葉刈りのぼる  
庄武春馬 (四十六歳・大分)

○夕ぞらにうかべる富士の嶺こえてうき雲かるく西へは  
しるも

卷五 (た・ち・つ・て・と・の部) 795名

高崎正秀 (三十八歳・富山)

○内院のなだりに凍る雪の白み目になれてさぶしわが朝  
仕 (内院は噴火口)

○目の限り岩ほの立ちに露じもくだり夜深く雲を出で来  
る月夜

○山おり来ててけはひしたしき麓はら縦の茂みに聲する鳥々

高島花泉 (二十四歳・静岡)

○雲の群動くともなく動きつつ今大富士をつつまむとする  
丹四朗 (三十七歳・水戸市)

○目に展くる躑躅ヶ原の一片うぐひす鳴けり日曇の風

○沖空の雲海より昇る日の塊の光とならぬ紅の巖しさ

富澤牧歌 (二十七歳・三重)

○雲ひくく下りみしづめる愛鷹はただき晴れし富士に  
重なる (御殿場)

○月の下はさやるものなし雪溪は夜目にもしるくなだれ

たるかも (富士登山) 卷六 (な・に・ぬ・ね・の・は・の部) 741名

中野正巳 (三十一歳・福岡)

○呼吸あらく夜なかの小屋の戸に立ちし人より早く霧吹  
き入りぬ (五合目小屋)

丹塚もりえ (明治三十六年生・熊本)

○起重機のゆふべしづかな街のはてちひさく美しく富士  
山が見える

野咲俊二 (大正四年生・三重)

○晴れゆけば富士に定まる笠雲あり昏れてののちの空の  
眞青さ

卷七 (ひ・ふ・へ・ほ・ま・の部) 691名

人形富士夫 (三十四歳・東京)

○富士白く晴れ渡りたる西の空飛びゆく鳥の群小さくなり  
平福百穂 (明治十年生・秋田)

○甲斐が峯に星はかたむき天の原かへりみすれば夜は明  
けむとす (富嶽の歌)

松川亀森 (四十一歳・熊本)

○大空の朝けに照れる剣が峰秀のとがりよりけぶる吹雪  
見ゆ (富士周遊)

松葉直助 (明治四十一年生・栃木)

○はるかなる山脈の上に富士が嶺はただ一塊の雪とかがやく  
松井緑水 (明治二十七年生・栃木)

○田子の浦にたつ白波はほのかなる光となりて雲の上に  
見ゆ (不二山頂よりの遠望・土用波)

卷八 (み・む・め・も・や・の部) 653名

山口茂吉 (明治三十五年生・兵庫)

○ひがしより光きたりて富士の嶺をあけぼのの空に照ら  
しいだしつ

山崎捷治 (明治四十一年生・埼玉)

○青田風さむしと思ふくれてゆく富士に向へる窓をあけつつ

## 「氷魚」のことから (154) 岡本八千代

日本中のほとんどを縦断しながら、大風、大雨と荒れ狂って台風十八号は去った。

しかし、今日はまた何という美しい青空だろうか。庭の陀兜羅の白花二つも咲き初めている。——今日、九月十九日、子規の百十一回の命日、糸瓜忌である。獺祭忌ともいうが。

子規は自分の部屋を「獺祭書屋」などと言っていたから。ここに「獺祭」の意味を書いておく。広辞苑では、次のように①カワウソが多く捕獲した魚を陳列するのを俗に魚を祭るとたとえていう語。

②詩文を作るときに、多くの参考書をひろげちらすことと、書かれていた。子規は②を思ったかな。

ここからは、やはり子規「わが病」の続き。

前回は、千住、谷中の森、三河島村の木立、小川の辺の露草など風景の中の自分を描いていた——そのつづきとなる。

・「余はなるべくゆるやかに歩行しながら道ばたの草花の種類を検査している。」

・三河島の入口にお宮があり、そばに大木もある。そこに絵馬のような板がつるされている。絵には、鉄砲を二挺交又したのが描かれてある。

・また、道祖神か何か五つ六つも並んでいる処から曲がると狭い泥溝があって、燕子花が一輪咲いている。返り咲でもあろう。

・それから村を抜けて又野へ出る。この辺は人気がないような静かな処。「余の足音を聞きつけてか百羽ばかりの稲雀は羽風を立てて向う木立へ隠れてしまった。」

ここまでは、主人公がどういう処に住み、歩き、どのように散歩しているかの描写。次に戦(日清戦争)が起った時の主人公の想い。

・新聞記者としての従軍した友人へのうらやましき。主人公は「文学に志する吾身でありながら、また新聞社に居ながら、従軍できない情なさ。職務を尽すことのできないことは男に生まれた甲斐がない。」

ここからは、がらつと変わって、風景描写と自分のことを描いている。

・「一かたまりの雲は一方からはびこつてきて今しもわが顔の真上にさしかかる。」

・主人公は草の上からねころびながら、従軍した友だちの平壤の戦を想像しているうちに「大砲の玉が二十間ほど前に落ちて土煙が立ったそうだ」と思いこむほど。「余は寝ころびながら首筋がぞくぞくと寒く感じた」ほど。

・突然と半身を起き直ると、「二つの蝨が、つがうたままてフィと向うの草の上へ飛んで落ちた」その蝨をつかまえていた時、かすかに午砲が聞こえた。

・最早出社の時刻。二つの蝨は彼の手をひろげると、別れ別れになって、一つは北へ一つは南へ飛んで往った。「吾手のひらに黒い血を残して」で一回は了り。

## ことのはスケッチ (419) 今泉 由利

### 『グレート・ジャーニー』⑤

○南極に近く、パタゴニア国立公園の内、太古の自然が続いているところ。一年のうち、三ヶ月間だけ、あとは雪に埋もれてしまいくことは叶わない。

そんなところにセリーナさんの友人の億万長者の別荘がある。「絵を描きにゆこう」、いつものようにセリーナさんは、突然誘って下さって、すぐ実行される。

飛行機、舟、馬、車、手助けして下さる人たち、食事を整えて下さるシェフ……すべて億万長者の自家用を尽さないことには辿り着けないところへゆく。

ブエノスアイレスからネウケンの空港までは民間の飛行機に乗った。そこに長者のプライベート・ジェットが待っていて、私達も、食料も滞在グッズも、シェフと助手も……諸々積み込み、離陸。たっぷりレアメタル、石油……埋まっているだろうパンパスを飛んで飛んで、湖畔、白く砂つばい所をめざし滑走路なんて無く、そこに野生の馬が三四頭、馬達が自主的に移動するまで上空を旋回して待っていた。

湖畔に着陸。三台の車が待っていて、人間も食料も、飛行機に積んであったものを移し、ガタガタサンドサン道の道を走ること一時間。他の湖ラプラタ湖に着くと、船が待っていた。

この辺り、アンデスの湖は、岸からすぐ千メートルにもなる氷の水。浮力無し。湖に落ちた物は、何もかも限りなく沈んでゆくと。恐ろしさに身を硬くしつづつ、また一時間ほど。別荘の船着きに止る。

雪が屋根より積るといふ所なのに、巨大な一枚ガラスに四方を囲まれたリビングルーム。それぞれ一人づつに至れり尽せりのゲストルーム。ゲストルームに籠もって良いし、リビングルームで社交しても良いし……。植物の好きな人には植物専門家が控えていて下さる。山に登りたければ専門家がサポートして下さる。馬に乗りたければ馬の……。

三度三度の幾つ星？。アペリティブからナイトキャップまで、スターシェフの今を最高の至れり尽くせり。

危なくないように、邪魔をしないように、遠くから見守られていて、南極よりの空気のもと、木々草々と遊び、描き、髪も肌もつるつるびかびか。

○アフリカ・タンザニア・ラエトリ遺跡の人類、最古と残ざれている親子の足跡のように、私と子供と一緒に地球の上を歩いた足跡。子供達は子供達自身の足跡へ。私も私の足跡を。

○日本人だから、日本へ帰り着き、一月の緋寒桜を沖繩に観て、五月の北海道の十間道路のまだ固い蕾だったこと、日本列島の桜を追いかけた日々。富士桜がととても好き。

(おわり)



## 編集室だより【二〇一三年 九月】

○品川区八潮、仏像彫刻クラスに出掛ける。ヒノキの小さな角材より仏様の足を彫り出そうとする。

○コペンハーゲンより電話。玉由からだった。電波の届かないという所にいるらしい由野。

○あまりの暑さ、北区体育館での卓球練習を休んでいたけれど、十月からの練習へ、申し込みをする。

○奥多摩の山河にアーチストを訪れる、九月一ヶ月間にわたる「おくてん」始まる。

○新宿から、ホリデー快速おくとま号に乗り、一時間程、奥多摩に着く。

駅から方角を定め、歩きはじめる。深く繁る樹木の下方、多摩川溪谷の水音。切りたった崖のところ。山沿いに家。川沿いに家。それぞれの住いの庭の懐かしい木草花々。流水にわさび畑。養殖らしいプールに魚。水力発電の太いパイプ。この辺りより山への登りになる。トチの木下に散らばる殻、実が残っていない、猿とか野生動物が食べてしまったのかな。海沢川に沿って、かなりの坂を登る。山肌から水が湧きだしている。緑の中を三十分ほど歩くと、大橋邸、木彫工房「悦鹿」に着く。

○亥漆芸工房。奥多摩の木をつかって、白井建治さんは素晴らしい器を造られる。木地作りの工房のかたわらに、燻製の煙があがる。奥多摩の鹿肉や山女魚や…その時あった

物が燻製になってゆく。したいことだけがなされている空間。

○てのひら山野草。奥多摩の中から一つの山の山のなだりに、山野草が生えている。幾種類かの苔がびっしり地面をおおう。自のてのひらに地球をつつみ込むように苔玉を作り、山野草を植え慈しむ。星の皇子様になったよう。

○まだ見ぬ三十一の会場。行きたく、そわそわするけれど、山の中の山の中を歩いたのではまじやくにあわず。来年はきっと全部のアーチストを訊ねる。

○中秋の名月。芋名月。晴れ渡った空のまん丸お月様。まだ明るい東の窓より、中天の小さくなったお月様まで…ずっと一緒にいた。

○月島、佃田島の吟行。佃天台子育地蔵尊にはおどろく。住吉神社、佃大橋、隅田川の橋の絵を描き続けていた頃と、あまりに変ってしまった風景。後、生ビール、モンジャ焼。○大岡山「さとう」。料亭の料理がランチ風になっていたりして、気軽に、美しく、美味しい。さりげない最高。間仲氏との会食でした。

○二〇一三年度の「おくてん」は終了しましたけれど、奥多摩の木々で、個性豊かな「鹿達」を彫り出す「悦鹿」工房の展示は常設です。私のクロッキーも常設にしてくださいました。ご覧いただきたく思います。

二〇一三年「おくてん」を遠くおいでいただき見て下さってありがとうございます。

## 和菓子街道 (85)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

### 伊勢街道(8)

前々回、前回と小原木という菓子を紹介したが、白子には他にも数軒、この菓子を売る店がある。味比べしながら歩いて満腹になってしまったからというわけではないが、次なる伊勢上野宿では甘いものは一休み。

上野は宿内が約2キロにも及ぶ長い宿場町で、俗に「上野のふんどし町」と称されたとか。かつては青物屋や菓子屋もあったらしいが、今はほとんど店もなく、通りはひっそりとしている。それでも、ところどころに虫籠窓や蔵のある家が残っており、風情を保っている。宿場町の中心近くには「弘法井戸」と呼ばれる古井戸がある。中を覗き込むと黒く冷たい水が湛えられている。桶があるから、この水は今も使われているのだろう。

上野を出てしばらく行くと、「痔神社」なるお宮を発見。元々は「地神社」といい、土地の神を祀っていたらしい。それが、明治の頃には「痔神社」と呼ばれるようになったというが、その方面でお悩みの方々の間では全国的に有名らしく、「お礼参り」に訪れる人も少なくないのだとか…。



旧家の建ち並び、宿場町の風情を残す伊勢上野。

## お知らせ

▽十二月号の原稿は、十一月一日(金)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

## 原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A  
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

## 編集後記

あの暑かった夏が嘘のように寒さすら感じられる朝晩。虫の音もこもこも。すっかり秋になりました。歌心の一層かき立てられる季節の到来です。

△いつも「私の一首」に御協力ありがとうございます。今までは編集部の方で選ばせて頂いていました一首ですが、今後は自選の一首とさせて頂きます。ご自分の作品の中から思い入れのある一首補足したい一首、とくに上手に出来た一首。どんな理由でもかまいません、二首を選んで規定の文字数内で、歌稿に同封してお送り下さい。

毎月お届けする会誌の中に「私の一首」の原稿用紙が同封されていたらお送り下さい。不明な点がありましたらお問い合わせ下さい。

編集部

## 三河アラギ規定

◇「三河アラギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アラギ」会員であることを必要とする。  
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アラギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一ヶ年分二万円の前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知されたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十五年十月二十五日印刷 第六十巻 第十一号  
平成二十五年十一月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘

発行人

平松 裕子・山口 千恵子

発行所

今泉 由利  
三河アラギ会

三河アラギ発行所 〒一四一〇〇三二  
東京都北区王子本町一の二六の六A  
TEL (〇三)五九二四一〇六五  
振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九  
E-mail yuri188@cronos.oon.ne.jp  
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>  
印刷所 株式会社 核創美